

## 大学・小学校・地域の連携による地域教育実践

後 藤 直

### はじめに

佛教大学教育学部では近接する地域の小学校や京都市教育委員会との教育連携をもとにした学部生による地域教育実践が取組まれてきた。一つは教育ボランティア活動としての「ユーアイ・スクエア」への取組である。これは京都市立小学校と京都朝鮮初級学校との交流会であり、学部生が市立小・初級学校の教職員及びPTA・オモニ会と連携しながらこの取組の企画・運営に携わってきた。また、「佛教大学生の楽只コミュニティセンター学習施設事業派遣に関する協定（2002/6）」が京都市教育委員会との間で締結され、学部生による教育施設での日常的な学習指導・学習相談指導が行われてきた。さらに、筆者の研究室ではゼミ生が京都市立楽只小学校の学校評議員となり校内補講の指導補助などに取組んできている。

「大学・教育委員会間で組織・継続・相互的交流に向けた体制づくりと教員の養成・採用・研修改善の為の具体策を都道府県段階で協議すること」を指摘した「教育職員養成審議会3次答申—養成と採用・研修との連携の円滑化について（99/12/10）」（以下「教養審3次答申」）を受けて、国立の教員養成系大学などにおいても教育委員会との教育連携のもと学生の学校行事への参加・参観実習・実技教科での補助・部活動・適応指導教室や児童・生徒へのカウンセリング活動などがここ数年来、積極的に取組まれてきた。

本稿では「教養審3次答申」における教育連携のモデル的な取組である鳴門教育大学と鳴門市・徳島県教育委員会との事例、学生による水泳指導がきっかけとなり取組まれることとなった玉川大学文学部教育学科と稲城市教育委

員会との教育連携、さらに佛教大学における同和・人権教育ネットワークをベースとした地域密着型の教育連携を検証しながら、今後の教員養成のあり方を大きく変えるモデルケースとなり得る大学・地域学校・地域と教育委員会による『地域教育をベースとした教員養成』のあり方を論じる。

## I. 大学と教育委員会・地域学校との教育連携

2001年8月23日、文部科学省は報告書「教員養成等における大学と教育委員会の連携の促進に加えて 一手を結ぼう、大学・学校・教育委員会―」(以下「報告書」)を発表した。サブタイトルにあるように「一学生の学校教育への参加の機会を拡大しよう」というもので、学校行事への参加・参観実習・実技教科での補助・部活動・適応指導教室や児童生徒へのカウンセリング活動などへの参加等を具体的に示している。

「報告書」は教育連携の目的を学制の導入、戦後の教育改革に続いて第三の教育改革と言われる2002年度からの新学習指導要領完全実施を軸とした「今回の教育改革を推進できる力量を備えた教員の養成である」としている。これまで大学が担ってきた教員養成に教育委員会が関わり、一方、教育委員会が担ってきた採用・研修に大学が関わり「教員の資質向上施策を総合的・体系的に推進する」というものである。言い換えると大学と教育委員会・地域学校との『人的・知的資源の共有の具体化』となる。

具体的な連携としては学部学生によるボランティア活動的な学校行事・参観実習・水泳指導などの実技教科でのTTや教員補助、部活動、適応指導教室などへの参加と大学教員等の指導のもとでの「不登校児童生徒への学生の訪問・カウンセリング」活動が挙げられている。もちろん、双方向の教育連携ということから小中学校にとっては、大学講義の活用・校内研修やカリキュラム・指導法の開発などの協力が挙げられている。

これらの具体的な取組を通して「報告書」は大学にとって期待できる成果として「学校現場に即した教員養成教育の実施、教職への意識向上、大学の研究活動の活性化など」の3点。一方、教育委員会・学校に期待される成果として「現職教員の専門性の向上、ニーズに合った教員養成、教育活動の充実・活性化」などの4点を挙げている。

次章では「報告書」にもとづいて学生の地域教育実践に焦点を当てながら鳴門教育大学・玉川大学文学部教育学科それぞれの教育委員会・地域学校との教育連携について検証する。

## II. 教育連携の実際

### 1 鳴門教育大学と鳴門市・徳島県教育委員会との連携の取組

2000年6月21日、鳴門市と鳴門教育大学間で『教育連携の充実・強化を目的とした意向書』が締結され、これにもとづいて教育連携の充実を計画的・継続的に推進し具体的な連携事業を協議する組織として『鳴門市・鳴門教育大学協力推進会議』が設置された。(図1)

具体的な教育連携としては、部活動支援ボランティアの小学校等への派遣である『ふれあい事業』が児童・生徒とのふれあいと教職への関心を高める活動として取組まれている。また、学生の実践的な指導力育成をねらいとして化学・生物・地学実験などの授業での教材開発や実験観察や運動方法実習として連携校のフォークダンス表現と作品づくりの指導補助などを行う『フレンドシップ事業』がもう一つの教育実践として取組まれている。

2001年度からは大学院生の実践的な課題解決力の育成を目的とした授業科目として「教育実践研究」が開講されている。これは、学校における実践的な課題について大学教員と共に大学院生が参加し学校との共同研究を推進しようというものである。さらに、大学入学後の早い時期から教職や学校への関心を喚起させ実態を体験的に理解させることを目的に、学校教育専修の学部生1年次～3年次を対象として学級の一日を教員及び児童と共にする、年に1回の学校訪問が行われている。

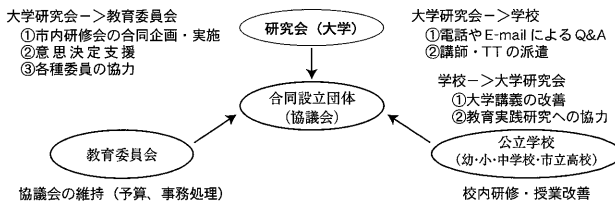


図1 「地域一体型教育改善」の組織体制（「報告書」より）

## 2 玉川大学文学部教育学科と稲城市教育委員会との連携の取組

2000年3月31日に玉川大学文学部教育学科と稲城市・教育委員会とで締結された「教育協力協定」は3点で構成されている。1点目は『稲城市内の小中学校18校における教育活動充実での協力』である。玉川大学教育学科学生教育ボランティアの稲城市への派遣であるこの取組は、教科学習・給食・行事・委員会など様々な学校教育活動に学生が関わっている。(図2) 2点目は『参観参画一日実習』である。幼・小・中学校の授業参観を通して学生の実習現場に対する理解を深め、教職に対する心構え・研究の視点などについての発展的な契機とする教育実習の一環と考えられる取組である。3点目は玉川大学心の教育実践センター、教師教育開発研究センターによる教員派遣、tap(玉川アドベンチャープログラム)による研修及び派遣の協力である。

学 校 名	学 年	活 動 (曜日・時間)	活 動 内 容	配 慮 事 項
稲城第二小	4 年	木 9:00~15:00	<ul style="list-style-type: none"> <li>・給食指導補助(1~3年)</li> <li>・合奏指導補助(5年)</li> <li>・個別に指導が必要な子どもへの援助</li> <li>・地域めぐりの引率補助(低学年)</li> <li>・休み時間の子どもの遊び</li> <li>・パソコン指導補助</li> <li>・ワープロ打ち</li> <li>・ポスター掲示</li> </ul>	ボランティアと教職員や子どもとの関係づくり (教職員とボランティアの希望の調整、子どもと自由に遊べる時間の確保) ボランティアの活動内容の掲示(板書)
城 山 小	3 年	土 8:15~12:15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導、学級での集団活動上困難な児童への個別指導、介助(2年)</li> <li>・担任補助(テスト採点の手伝い、体育・生活科指導の補助)</li> <li>・教室、教材等の整理、環境整備</li> </ul>	教員と同様に勤務するよう心がけて欲しい旨、お願い 41名、単学級の3年生にはいることを、共通理解

図2 具体的取組の一覧

### Ⅲ. 佛教大学教育学部と地域学校・地域及び 教育委員会との教育連携

#### 1 学部生による教育ボランティアの取組

##### (1) ユーアイ・スクエア

##### ① ユーアイ・スクエア2002

ユーアイ・スクエアとは『YOU I SQUARE・友愛広場』のことであり、その名が示すように京都市内の公立小学校と朝鮮初級学校との交流会のことである。京都市内の3つ朝鮮初級学校とそれぞれに隣接する5つの市立小学校間で日常的に進められてきた交流を充実・発展させる取組として「異文化理解を進めること、民族や国籍を越えた友情を育むこと」を目的として2000年2月に第1回が開催された。

翌年の第2回までは参加校教職員による企画・運営で、公立小学校の体育館を会場として取組まれていたが、第3回にあたる「ユーアイ・スクエア2002（2002年2月23日実施）」からは会場を佛教大学鷹陵館に移し、企画から運営に至るすべてが学部生の手によって進められることとなった<sup>(1)</sup>。

佛教大学・市立小学校・初級学校などから構成される実行委員会が組織化され2001年12月18日に第1回が行われた。これ以降、およそ2ヶ月間にわたって事務局会議や各パートでのミーティング・準備が学部生を中心に精力的に取組まれた。その中で、

『オープニングではシンボルマークであるユーアイマークの作成と全員合唱、ジェンカにあわせて全員でのエンディング』などのスケジュールが確認された。(図3) 事前の活動では楽只小学校と京都朝鮮第二・三初級学校で学部生による音楽と図工の授業が行われた。

- ・オープニング  
開会の言葉 交流発表  
「ユーアイマーク」の完成 全員合唱
- ・ふれあいタイム  
世界で一番早く終わる鬼ごっこ  
ユーアイビンゴ グループ内整列ゲーム 等
- ・屋 食  
～オモニ会・PTAによるトックスープ～
- ・チャレンジタイム  
ユーアイランキング (大縄跳び・缶積み 等)  
朝鮮と日本の遊び (チエギチャギ・けん玉 等)  
笑う門には服着たる (チョゴリでの写真撮影)  
朝鮮音楽ランララン (民族音楽体験)  
ユーアイメモリー (寄せ書きづくり)
- ・エンディング  
～みんなでジェンカ～

図3 ユーアイスクエア2002 当日のプログラム

当日は、第2回を上回る参加9校、約300名の子どもたちが全体会場の佛教大学鷹陵館に集まった。『ユーアイマーク披露』でのオープニング。グループを単位としたふれあい・チャレンジタイムでの活動。学部生・教員スタッフなどを含めた参加者全員の500名によるエンディングで幕を下ろした<sup>(2)</sup>。

## ②教育連携としてのユーアイ・スクエア

2000年10月下旬に「第2回YOU I SQUAREの開催場所として佛教大学の鷹陵館を使用できないか」という依頼が実行委員会からあり日程調整を試みたが、結果的には鷹陵館使用が無理となった。その際に「今回は、時間がなく施設使用は無理であったが、ぜひ来年は具体化したい。については単なる施設の賃借で終わらせることなく、教育学部の学生が企画・運営に関わる—という協同の取組ではどうか？」との筆者の提案が、学部生によるユーアイ・スクエアの企画・運営のきっかけとなった。提案の根拠となったのは、筆者のゼミを中心とした教育学部の学生と大学周辺の小中学校との教育連携による「2年にわたっての二つの大きなプロジェクトの成功」であった。一つは、2000年9月に実施された佛教大学第2回教育国際ボランティア<sup>(3)</sup>での取組で、ボランティア参加学生が近接する楽只小学校と西安郊外の平山希望小学校で図工・音楽の授業を行い、そこで完成した作品の交歓を両校間で行うことをメイン活動として位置付け、小学校との教育連携のもとに取組まれ、日中の小学校及び大学にとって大きな成果となったこと。さらに、翌2001年8月には、ボランティア参加学生によるスタディツアー『中国に行く、ほく・わたし』<sup>(4)</sup>が企画され、小中学生を中心に総勢40名が参加し、作品交歓から子ども同士の実際の交流へと前年の取組を発展させたことによる。このような取組がベースとなりユーアイ・スクエアが誕生することとなった。

## 2 「学習施設事業に関する協定」を通した教育委員会・地域教育施設との教育連携

### (1) ツラッティ子どもセンター（京都市楽只学習施設）での学習指導

ツラッティ子どもセンター（以下「センター」）の前身である京都市楽只学習センターは同和教育施策の実施施設として1976年に建設され70～80年代を通して教育問題における「格差の是正と低位性の克服拠点」となった。同

和地区児童・生徒を対象に学力向上・進路保障を目的とした補習学級（以下「センター学習」）が開講されるとともに 80～90年代にかけては地域のニーズやその時々課題に応じる形で「同和問題解決の主体者を育てるための同和問題学習」や幅広い学力を育成する「すそ野学習」も取組まれてきた。90年代半ば以降の「まちづくりへの子どもの参加」を具体化した「空き地ワークショップ」<sup>(5)</sup>は筆者との共同研究として取組まれ、人権・同和問題学習の新展開として多方面より注目を浴びてきた。さらに、97年からは取組の対象を同和地区児童・生徒に限らず、地域の全ての子どもへと広げ、2中学校区を対象とした地域教育センターとしてリニューアルされた。

99年以来、筆者のゼミ生を中心とした教育学部生が小中学校及びセンターとの教育連携に基づいて「まちづくり学習」や「教科学習」のセンター学習指導員として関わってきた。計画されたセンター学習の目的・内容・日程等について事前に協議し、共通理解を図った上で小中学校の教員の補助としての参加である。また、個別指導なども行っている。2001年の7～8月にかけては先述のスタディツアー参加者などを対象とした中国の歴史・会話・文化についての講座「中国に行く、ほく・わたし」が学部生によって開講された。このように具体的な教育連携が進められる中、京都市教育委員会は佛教大学と「佛教大学生の楽只コミュニティセンター学習施設事業派遣に関する協定(2002/6)」を締結した。協定書によると業務の内容は、実験・実習・グループ学習時の補助・図書室の運営補助・読書指導と学習相談などとなっている。この協定を受け、2002年度は21名の学部生が指導員登録を行い小中学生の学習指導などにあたっている。(図4)

**小学生への取組** (月～金曜日 16:30～18:00)

- |                                      |                  |
|--------------------------------------|------------------|
| 「まち」にふれあう活動 (まちに働きかける体験・活動を重視した地域学習) |                  |
| 「まちの達人に学ぶ」創作活動                       | 「心を伝える(手話・点字)」学習 |
| 「おもしろ科学」学習                           | 「ひとにやさしいエコロジー」学習 |
| 「世界まるごと発見」学習                         | 「自主学習室」          |

**中学生への取組** (月～金曜日 19:00～20:40)

- |       |                                  |
|-------|----------------------------------|
| 総合的講座 | 興味・関心、個性・特技を伸ばし、幅広い技能・教養を身につける学習 |
| 基礎的講座 | 学校での学習の土台となる各教科の基礎的内容をテーマとした学習   |
| 専門講座  | 英会話と美術(デッサン)に関する専門的な学習           |
| 自習室開放 | 自主的計画的な自学自習                      |

図4 ツラッティ子どもセンターにおける取組(抜粋)

### 3 地域学校との教育連携

#### (1) 京都市立楽只小学校における学生学校評議員

1998年9月の中央教育審議会答申「我が国の地方教育行政の今後の在り方について」を受けて学校教育法施行規則の改正によって「学校評議員」が制度化され2000年4月よりスタートした。「地域ぐるみの新しい教育システム構築の為の地域・住民に開かれた学校づくりと学校の裁量権の拡大に伴う説明責任」を目的としたものである。

パンフレット「スタート学校評議員（平成12年1月文部省）」によると①保護者や地域住民の意見を反映させた特色ある学校づくり ②「総合的な学習の時間」などへの地域住民の支援 ③学校を中心とした地域ぐるみの子育て ④地域行事や福祉施設との連携としたボランティア活動など、地域と連携した教育活動の活性化の4点挙げている。

京都市教育委員会においても「学校評議員設置要綱」が整備され、京都らしさ・開かれた学校づくりの発展・学校主体による地域教育の推進・小中など校種間連携の推進などの考え方を明らかにしながら市立小学校での学校評議員制度が具体化されてきた。京都市立楽只小学校においては地域の各種団体から選出された評議員に交じって2002年度より筆者のゼミ生が学生評議員として学校運営に関わっている。具体的には全学年を対象にした放課後補習の指導補助と1週間に及ぶ授業実践に取り組んできている。

#### (2) 放課後補習と授業実践

「子どもたちとふれあい、子どもたちが本当にわかる授業、楽しい授業とはいかなるものか、それを追求したい」2002年度、ゼミ3回生のテーマである。このテーマに迫るための取組として、子どもたちの基礎・基本の定着を図るため楽只小学校が進めている校内補習に指導スタッフとして参加することとなった。この取組は一年を通じて同じクラスに関わるということであり、その関わり方はクラスによって違いはあるものの、学級担任とゼミ生が予め補習への進め方について検討し、子どもにとって有効な手立てを共通理解した上で取組まれている。その事前の話し合いを踏まえ、継続して同じ子どもや同じグループに関わることで、子どものつまずきを分析し、担任と協議しながらそれぞれの子どもにあった指導を進めている。



さらに、夏休み明けの9月の第1週にはゼミ生による「授業実践」が行われた。先述のゼミのテーマに迫るべく「児童相互の学力間格差が明らかになり始める」中学年での実践である。校内補習の関わりと並行しつつ、7月より教科・単元の決定や事前の打ち合わせがゼミ生と学級担任とで進められた。夏休み期間中から授業実践に向けての準備活動が始まることとなり、教材研究・授業者の決定・指導案の作成と模擬授業なども取組まれた。指導案作成に向けた事前協議は楽只小学校・学習施設において、楽只・鷹峯小学校教員及び学習施設指導主事の助言も受けながら進められた。

#### Ⅳ 地域教育をベースとした教員養成

大学と教育委員会・地域学校との『人的・知的資源の共有の具体化』となる「教養審3次答申」を受けて、国立の教員養成系大学などにおいては教育委員会との教育連携のもと学生の学校教育活動への参加などがここ数年、積極的に取組まれてきた。Ⅱでは「報告書」をもとに「教養審3次答申」におけるモデル事業的な教育連携に取組んできた鳴門教育大学と鳴門市・徳島県教育委員会との事例と小学校における学生の水泳指導から取組まれることとなった玉川大学文学部教育学科と稲城市教育委員会との教育連携を具体的な事例から検証してきた。

Ⅲでは佛教大学教育学部と市立小学校・初級学校、教育施設及び教育委員会との教育連携をもとにした学部生による地域教育実践をⅡと同様、具体的な事例を挙げつつ教員養成の視点で検証してきた。この教育連携は事例からも明らかなように40年に及ぶ京都市の同和・人権教育の成果としてある既存の教育ネットワークに佛教大学教育学部が加わる形でできたものである。佛教大学にとっては『教育（教員の養成を行う）学部を擁する大学と地域学校・地域の教育連携による現場での教員養成実践』であり、近接の小学校・地域にとっては『同和・人権教育の新展開としての大学を巻き込んだ地域教育』となる。

今後は大学・地域学校・地域と教育委員会による『地域教育をベースとした教員養成』の具体化に向けて、大学レベルでは学内組織の整備「（仮称）教育研究実践センター」の設置と学外ネットワークの構築が急務である。（図5）

国立の教員養成系大学などでは、「学校教育実践の総合センター」が学校現場との教育実践交流・実習教育・教育相談などの教育研究の拠点として設置されており、地域学校などとの教育連携において重要な役割を果たしている。佛教大学では早くから「教育実習指導室」が設置され実習に関する企画・運営・指導及び諸機関との連携が行われてきたが、これを発展的に解消し教育実践交流・実習教育・教育相談などの教育研究施設としてリニューアルする。そしてここを拠点に『地域教育をベースとした教員養成』の具体的な取組を進める。

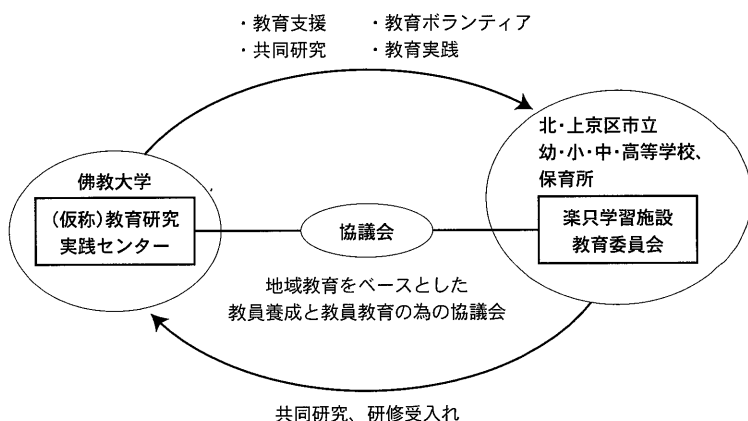


図5 地域教育をベースとした教員養成と教員教育の組織

## おわりに

本稿では、教員養成系大学・佛教大学教育学部における教育連携実践を『教員養成の視点』から検証しつつ、大学・地域学校・地域と教育委員会による『地域教育をベースとした教員養成のあり方』を論じてきた。取組は始まったばかりであり、今後はこの連携がどのような教育効果をあげたのか、大学と地域学校・地域・教育委員会の双方向からの検証が必要である。

## 【脚 注】

### (1) 参加学生スタッフの感想

8つのパーツを一つの絵にしたユーアイマークのように、ユーアイ・スクエアに集まった子どもたち、学生、先生方、一人ひとりがユーアイ・スクエア2002を作った。ユーアイマークに込められた「友達を無限大につくる、ユーアイスクエアが無限大に続いてほしい」「朝鮮初級学校と市立小学校との距離が近くなるように」という子どもたちの純粋な思いが、より広がり、発展する未来のユーアイ・スクエアを支え続けてくれると思う。初めての佛教大学の施設使用、初めての企画段階からの学生の関わりで私自身様々な壁にぶつかり、葛藤を繰り返した。一緒に悩み・笑い・喜び・泣く・そんなユーアイ仲間ができ、一人ひとりが大切で・一つの目標に向かって意見を交わし・失敗を恐れずにあきらめないという熱い熱いユーアイ精神を培った。ユーアイ・スクエア2002で得たエネルギーを糧にし、これからユーアイおばちゃん、ユーアイおばあちゃんになってもユーアイ・スクエアを盛り上げていきたい。

### (2) 参加児童の感想

- ・ユーアイマークが完成した瞬間、「自分のデザインした絵がこんな風になるなんて」と感動しました。インタビューで答えた「世界中のいろいろな人が、無限に友だちをつくれる」というマークに込めた意味のように、いろいろな人と交流して、新しい仲間をつくることができた思い出の日になりました。
- ・初級学校の人たちや違う小学校の人たちと話して、友達になれることがユーアイ・スクエアのいいところだと思います。ほかに、初級学校のお母さんたちが作ってくれた朝鮮の料理がとてもおいしかったです。

### (3)(4) 拙著「まちづくりとしての地域教育」に詳しい

### (5) 拙論「空き地ワークショップと参加型学習の実践」に詳しい

## 【参考文献】

中央教育審議会第1次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」

1996/07/01

教育職員養成審議会第1次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」

1997/07/21

教育職員養成審議会第3次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」

1999/12/10

文部科学省（報告書）『教員養成等における大学と教育委員会の連携の促進に加えて  
一手を結ぼう、大学・学校・教育委員会一』 2001/08/23

国立の教員養成系大学学部の在り方に関する懇談会（報告）「今後の国立の教員養成系大学学部の在り方について」 2001/11/22

中央教育審議会（中間報告）「今後の教員免許制度の在り方について」 2001/12/25

文部科学省高等教育局「大学（国立大学）の構造改革の方針について」 2002/01

